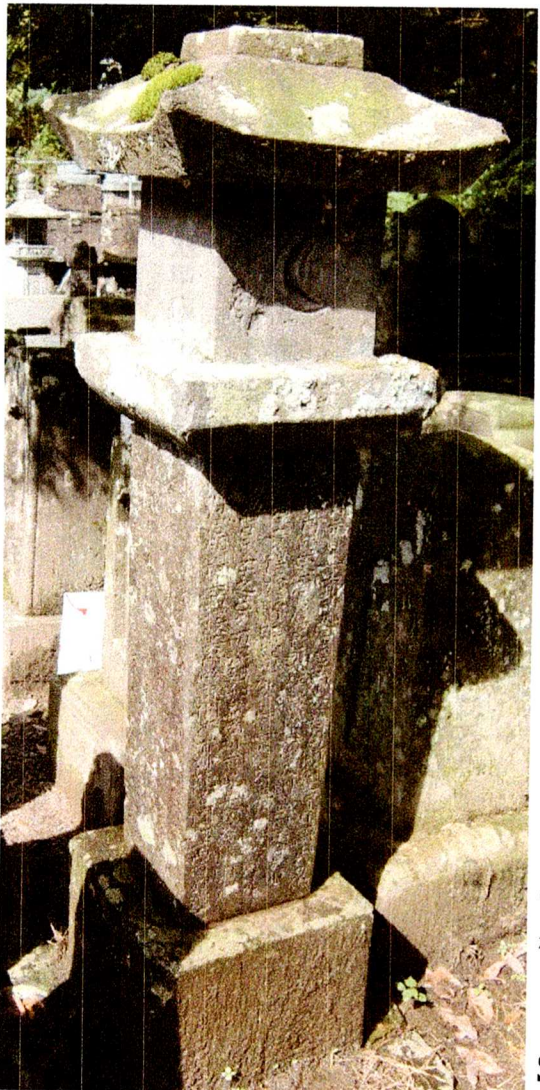


## 日高藪仙（正業）燈明台碑文

—高山昌林寺跡墓地—

日高藪仙（正業）氏はもと大田氏で文政五（一八二二）年生まれ。宇都宮正直より四歳年下。後に日高氏を継いだ。剛直にして世に合わず医を業とした。清廉で文雅を好み宇都宮とともに、和歌を鹿児島の薩摩桂園派の歌人・山口利雄氏に師事した。碑の第四面には日高氏の和歌二首が刻まれている。変体仮名を含む和歌の転写には県立図書館の山口まゆみ氏（高山出身）に協力を頂いた。

碑面部分【高さ66、5cm×縦22、0cm×横22、0cm】



### 【転写】

（第一面）

明治十七年歳次甲申十二月乙亥吾友日高藪仙君卒年六十三翌日葬于先人墓側明年十二月及營墳墓家人請余記余哭曰君少於余四年豈憶少者歿而長者存焉嗚乎可哀也余雖不忍銘而交友之義不可辭乃序而銘之君諱正業實大田氏父諱用貞母伊東氏以文政五年壬午

（第二面）

正月元日生矣日高正常無子乃養君爲嗣於是冒日高氏及長爲監察官屬亡幾辭職以其爲人剛直而不合於世也後竟隱於醫唯以清廉自持素好文雅学和歌於鹿兒嶋山口氏学之已久而深知和歌爲可貴晚年愈發憤閉戸

深思頗得其蘊故其所吟詠間亦有妙絕者因拔兩首於遺

(第三面)

稿中刻之碑石以傳示後人庶幾以慰厥魂乎先娶內之浦氏生一男

三女男曰正喬繼家女長適藤井道愛其次適宇都宮慎吾

其次適兒嶋綱利內之浦氏卒後再娶田野邊氏無子銘曰

高山之邑弓城之闈君生秀逸常避俗塵獨尚其志不肯屈身

面諛是遠朴訥是親予與君交久而愈醇永訣異路惜也斯人

(第四面)

明治十八季歲在乙酉十二月庚午宇都宮正直撰

鷹狩

はし多可能尾ふ佐の鈴乃音さえて霰婦り志くミ狩野の原

雪中尔梅

鶯も志らぬ垣ね尔咲そめて雪まな可ら毛尔本ふ梅可香

【読み下し】

明治十七年歲次甲申十二月乙亥、吾が友・日高敷仙君卒す。年六十三。翌日、

先人の墓側に葬る。明年十二月、墳墓を営むに及び、家人、余に記せんことを請

ふ。余哭して曰く、君余より少きこと四年、豈に憶はんや、少者は歿して、長者

は存するを。嗚乎、哀しむ可きかな。余、銘するに忍びずと雖も、交友の義とし

て辞す可からず。乃ち序べて之れに銘す。

君、諱は正業、実は大田氏なり。父、諱は用貞、母は伊東氏なり。文政五年壬

午正月元日を以て生まる。日高正常、子無し。乃ち君を養ひて嗣と為す。是に於

て日高氏を冒す。長ずるに及び、監察官屬と為るも、幾くも亡く辞職す。其の人

と為りや剛直にして世に合はざるを以てす。後、竟に医に隠れ、唯、清廉を以て  
自ら持すのみ。素より文雅を好み、和歌を鹿兒島の山口氏に学ぶ。之を学ぶこと  
已に久し、而して深く和歌を知り、貴ぶ可きと為す。晩年愈よ発憤し、戸を閉  
して深思し、頗る其の蘊を得たり。故に其の吟詠する所、間々亦た、妙絶なる  
者有り。因つて両首を遺稿中より抜き、之れを碑石に刻し、以て後人に伝示す。  
庶幾は以て厥の魂を慰めんことを。

先に内之浦氏を娶り、一男三女を生む。男は正喬と曰ひ家を継ぐ。女、長は  
藤井道愛に適ぎ、其の次は宇都宮慎吾に適ぎ、其の次は兒島綱利に適ぐ。内之浦  
氏の卒後、再び田野邊氏を娶るも子無し。銘に曰く、

高山の邑に、弓城の闔。君秀逸に生れ、常に俗塵を避く。独り其の志を尚く  
して、身らを屈するを肯んぜず。面諛は是れ遠ざけて、朴訥は是れ親しむ。予と  
君との交りは、久しくして愈よ酔けれど、永訣して、路を異にす。惜しいかな、  
斯の人。

明治十八年、歳は乙酉に在り、十二月庚午。宇都宮正直撰す

鷹狩 (鷹狩り)

はし多可能尾ふ佐の鈴乃音さえて霰婦り志くミ狩野の原 (一部、変体仮名)  
(はし鷹の尾総の鈴の音さえて霰降り敷く御狩野の原)

雪中尔梅 (雪中に梅)

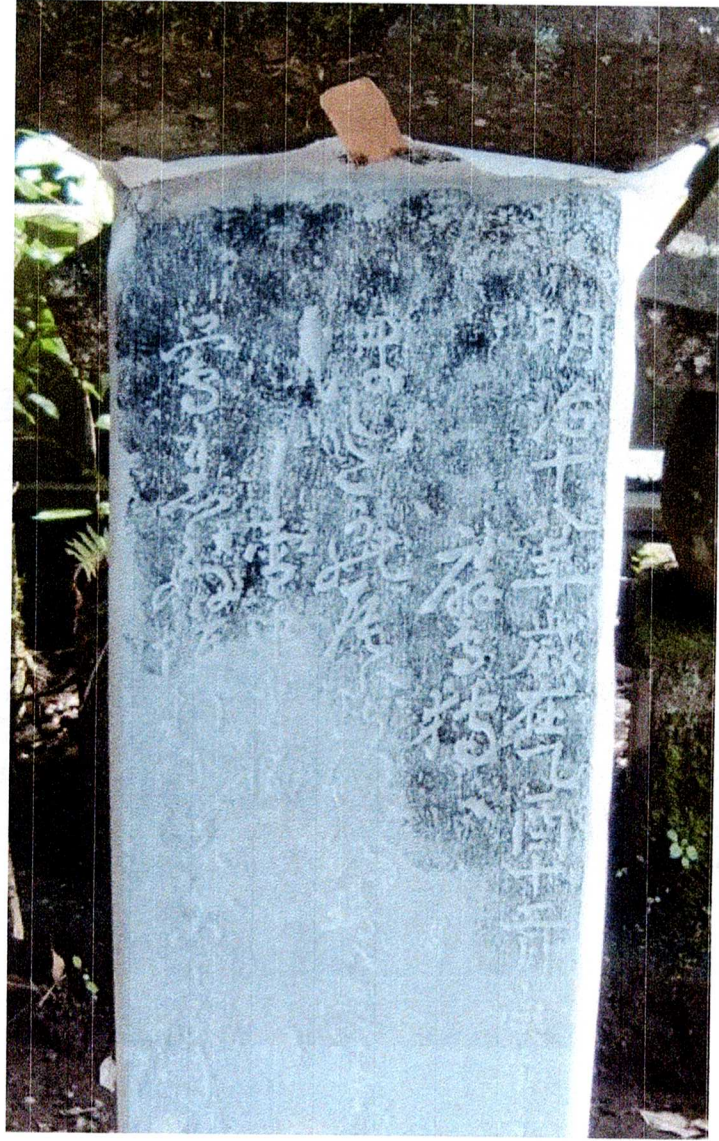
鶯も志らぬ垣ね尔咲そめて雪まな可ら毛尔本ふ梅可香  
(鶯も知らぬ垣根に咲き初めて雪間ながらも匂ふ梅が香)

### 【注】

○明治十七年・一八八四年。○文政五年・一八二二年。○嗣・跡継ぎ。○冒す・他家の姓を名乗ること。養子に入ること。○官属・部下の役人。属官とも。○山口氏・鹿児島薩摩桂園派の歌人、山口利雄。○蘊・おくそこ、極致。学術技芸などの奥義。○面諛・面と向かってこびへつらうこと。○朴訥・質朴で飾り気のないこと。○異路・死者と生者と道を異にすること。死ぬこと。○はし鷹の・枕詞。尾羽に鈴をつけて鷹狩に使うことから「すず」や「すずろ」にかかる。○御狩野・天皇や皇子などの狩りをする野を敬つていう語。

### 【漢詩部分の口語訳】

高山郷には、(敵のために容易に破られないように) 弓張城の門があるように、藪仙君は秀逸の才能をもって生れたが、(扉を有しているかのように) 常に俗塵を避けたのである。そして、君は専ら自分の志を尚くして、身らの心を曲げるのを良しとしなかった。また、自分に面と向かって媚びへつらうものに対しては全く遠ざけ、朴訥な人物に対しては、大変親密にして交わったのである。私と君との交流は長く、ますます純朴なものであったが、君は亡くなって、死者と生者と道を異にすることになってしまった。ああ、なんと惜しいことであろうか、この藪仙という人物を亡くしたのは。



明治十八年庚午二月都宮正直

為

中

字

名